

改修ならではの制約を越え 生まれ変わったさわやかトイレ



校舎全景。開口部に見えるブレースは耐震補強。校舎からトイレと階段室が突き出している。

日本一の学校トイレをめざし 策定された「トイレ改修基本計画」

今、全国の学校では想定される大地震に備え、校舎の耐震診断・補強工事を進めています。茨城県東海村も2002年から、1981年の建築基準法改正以前に建てられたものを中心に村内小中学校の耐震化の取り組みを始めましたが、それと同時に坂本菜子コンフォートスタイリング研究所の協力により村独自の「学校トイレ改修基本計画」を策定しました。

東海村長の「トイレは学校のもうひとつの顔」「日本一の学校トイレを」を合い言葉に、まずは生徒や教員に対する詳細なヒアリングやアンケートが行われました。同時に改修対象となる学校を実際に訪れての現地調査は、子どもたちがおかれている学校トイレの現状を浮き彫りにしました。

さらに、便器や手洗いボウルの経年劣化や扉・床・壁の蓄積汚れ、レバーからの漏水など、多くの課題と、使用者である子どもたちや先生からの「臭い・怖い」「ブレースを広く」「明るく安心なトイレがほしい」の声に加え、学校ごとの校風や特徴まで勘案しての改修プランがつけられました。

プランには、既存建物の状態を考慮しつつ、洋式便器などの新たな設備の採用、明るくしゃれたデザインといった多くの提案が盛り込まれています。これを基本計画として、東海南中学校のトイレ改修が始まりました。

既存スペースを変えずに 改修デザインを生かす努力

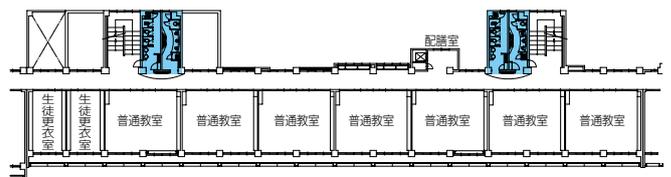
基本計画を受けての実設計は2003年、工事は2005年と2006年の2年にわたって行われました。学校施設の改修は生徒の学校生活に支障をきたさないよう、多く

は夏休みに進められます。今回の改修も7月に始めたものの、耐震補強や外装改修も同時に行われたため、10月いっぱいまでかかったとのこと。

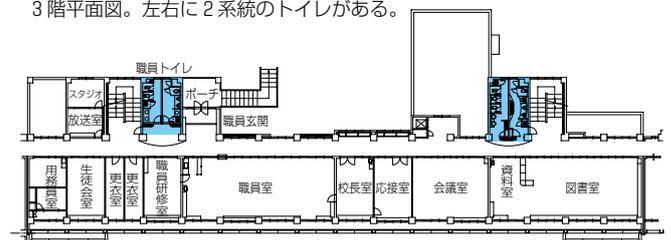
東海南中のトイレは校舎の東側と西側にひとつずつ、計2系統となっており、1年目は西側、2年目は東側の工事が行われました。この方法では、数は減っても各階に使えるトイレがひとつ残り、子どもたちにはあまり不便がありません。しかし設計側には高いハードルが課せられました。

「現状では一対になっている男女トイレを各階で左右に分ければ、ベンチも置ける広いスペースができると提案しましたが、ひとつの階で使えるトイレがまったくない状態が長く続くのは学校生活においては受け入れられません」と、東海村のパートナーとして実施設計業務に携わった団建築設計事務所の加藤木剛一さんは振り返ります。

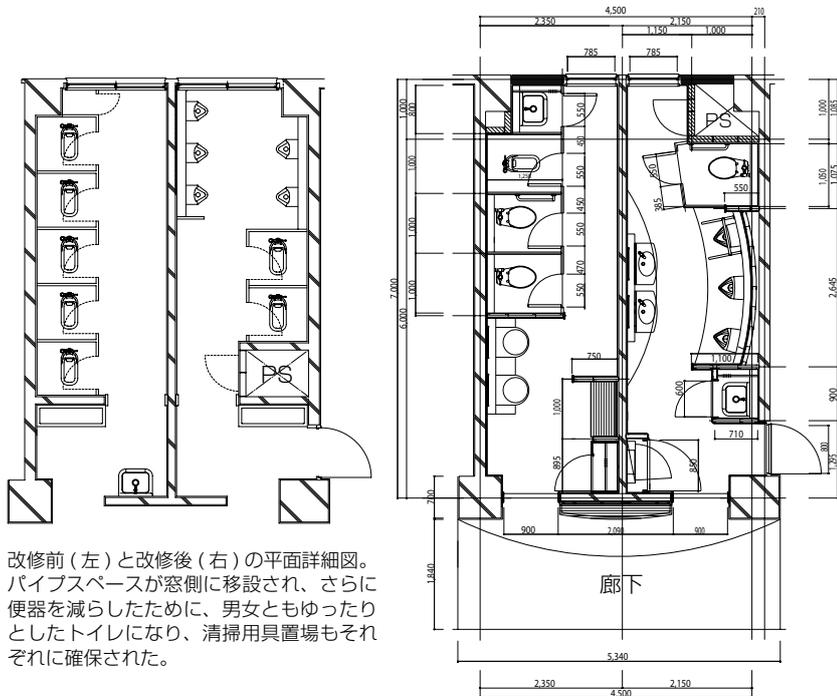
この時点で男女別案は消え、決して広いとはいえない既存スペースに、基本計画に盛り込まれた新しいデザインや設備を取り入れることになりました。しかしもっと



3階平面図。左右に2系統のトイレがある。



2階平面図。メインのアプローチは2階。左側のトイレは職員用。



改修前(左)と改修後(右)の平面詳細図。パイプスペースが窓側に移設され、さらに便器を減らしたために、男女ともゆったりとしたトイレになり、清掃用具置場もそれぞれに確保された。



パステルカラーに木調の飾り棚がアレンジされ、明るい色調とさわやかな雰囲気が子どもたちをひきつけるトイレのエントランス。

も特徴的である、男子小便器を曲線状に並べるアイデアは狭い空間では相当に難しいもの。それでも加藤木さんたちはあきらめず、基本計画にあったカーブを少し緩やかにする工夫でみごとにおさめ、狙い通りの柔らかな雰囲気をもつトイレの実現にこぎつけたのです。

基本計画からのもうひとつの大きな変更は、入口近くにあったパイプスペースを奥に移動したこと。「既存の位置だと器具のレイアウトが難しいので、全面改修するなりと思いついて部屋の奥に移動しました」と、改修計画の当初から担当した東海村都市政策課係長の河西徹雄さん。この英断でエントランス空間が広くなり、トイレに入る時の窮屈さが軽減され、トイレの快適性に大きく寄与したのはいうまでもありません。

加えて便器の数の問題がありました。従来の和式便器から洋式便器へと変える際、各ブースの面積が広がるため、自ずと便器の数は減ります。それが子どもたちを待たせることになったら……と悩みながらも、快適なトイレをつくってあげたいと、さまざまな検討が重ねられました。

そして改修後の生徒のアンケートでは「数が減った」との意見はちらほら、むしろ「明るくきれいで使いやすい」というコメントが圧倒的、という結果になりました。

色彩・鏡・棚・ガラスブロックで 明るく楽しく開放的なトイレが誕生

さわやかなミントグリーンの壁に、緩やかに弧を描くピンクの床、生花が活けられた飾り棚。校舎の廊下を歩いて行くと、トイレ付近の雰囲気が華やかに変わります。

女子トイレに一歩足を踏み入れれば、手洗いコーナー

には洗面器とセットになった丸い鏡が2枚、その反対側にも広い棚と大きな鏡が設けられています。

「中学生になったら身だしなみを整えるスペースが別にあってもいいのではないかと、手洗いとは別に大きめの鏡をつけて荷物も置けるようにしました。鏡は奥行き感を出して部屋に広がりを与えてくれますし、洗面と別につけることで手洗いを占拠されることもなくなります」と加藤木さんは話します。

改修後、ここは女の子たちがたまる楽しい場所となりました。正面奥の滑り出し窓の下部に使われたガラスブロックも、トイレ内の明るさに大きく貢献しています。

開放的なエントランスを実現した一方、プライバシーに配慮し、間仕切り壁を使って男女トイレとも廊下から室内への視線が直接通らないよう工夫されました。

「女子はブース扉が見えないよう、男子は小便器で立っているところが見えないよう、スペースの問題はありましたがぎりぎりのラインで考えました」と河西さん。

手洗い水栓はプッシュ式、便器洗浄は自動、照明は人感センサーが採用されました。東海南中学校の二川計太教頭は

「もともとは省エネルギー対策が目的でしたが、ライトがついていれば中に子どもがいるとわかります。いろいろなことが起きる中学校では、生徒の居場所を掌握できるという良さもありますね」といわれました。

洋式便器はすべて暖房付きです。女子トイレに3つ並んだブースのうちふたつは洋式で、和式もひとつ残されていますが、冬でも温かい便座は男子女子ともに好評です。



左 基本計画のアイデアを生かし、小便器は柔らかな曲線を描いて設置されている。
上 廊下から見た男子トイレ。



上 女子トイレ内部とブース。奥のガラスブロックからの自然光でトイレ内は明るい。
右 深めのボウルとプッシュ水栓の手洗いコーナー。向かいには大きな鏡を張った棚がある。



子どもたちが変わった！ 「きれいなままで使いたい」気持ちの芽生え

改修後の子どもたちのアンケートからは「明るくきれいで使いやすい」「臭くなくて気分がいい」「トイレに行くことが嫌でなくなった」と、新しいトイレができたことへのよろこびが伝わってきます。

「入口に生徒がたまっていつも混んでいるのが悩みです。女の子がふたりでブースに入って、洋式便器のフタに腰を下ろしてヒソヒソ話をしていたりもするんですよ」いごちがよすぎてね、とちょっぴり苦笑気味の二川教頭。臭い汚い怖いといった3Kトイレの姿は、ここにはあとかたもありません。

新しいトイレは子どもたちの心持ちも変えていきます。汚れたり故障しているトイレでは自ずと使い方も荒くなりがちですが、きれいになると「これを維持していかなきゃ」という気持ちが芽生えてくるというのです。

昼休みの後15分が全校一斉の掃除の時間です。トイレ掃除もちろん生徒たち自身で担当、1週もしくは2週間交代で順々に当番が回ってきます。

どの子も頭をきりとバンダナで覆い、洗剤や雑巾を使った熱心な仕事ぶりが印象的でした。素手と棒ブラシで便器を磨く子もいて、清掃意識の高さがうかがえます。

「きれいなトイレなのでもっときれいに使っていききたい」アンケートの1枚に記されたことばに、学校トイレが子どもたちに与える影響が伝わってきました。

次の世代を育てながら 地域にも貢献する学校トイレ

「教育立村」をスローガンに掲げる東海村は、「次世代の教育を充実させていく中で、学校のトイレ環境についても改善していこう」という考えです」とは東海村教育委員会学校教育課担当者のことばです。

学校開放により、地域の文化を支援する役割も東海南中学校は持っています。10歳代から60歳代の住民が参加して、年に6回プロの演奏家を招いて直接指導を受ける東海村吹奏楽楽器講座など、村の行事やイベント会場としても利用されています。その他、学校公開や体育祭などでも保護者や外部の人にトイレを使ってもらう機会は多々あります。利用者からは、「ホテルみたい」「学校のトイレじゃないみたい」など評判も上々で、改修されたトイレはさまざまな形で地域にも還元されています。

少子高齢社会の中、東海村の出生率は県下トップクラスを誇り、1955年の開村以来人口も増え続けています。現在トイレを改修中の小学校は2校、他の小中学校は校舎全体の改築が予定されているとのこと。「小中学校のトイレを日本一にしたい」という熱い思いは、これからの村を支えていく子どもたちの成長に確かな貢献をしていくに違いありません。

決められた掃除期間中、曜日によって今日は手洗い、明日は便器と重点箇所を決めて取り組んでいる。ブースの便器は毎日磨かれる。

